



T-PAS™で実感する体験型研修の実際

筑波大学附属病院

筑波大学附属病院では、シリンジの取り扱いにおける不具合事例などを模擬的に学ぶ、体験型の医療安全研修を実施しました。臨床医療管理部が主催し、さまざまな立場の看護師が参加した、T-PAS研修などの内容と効果などについて紹介します。

コロナ禍対応のオンラインによる体験型の医療安全研修を実施

2021年7月28・29日、筑波大学附属病院臨床医療管理部では、予測・予防型の体験学習である「T-PAS研修」を開催した。

T-PAS研修とは、テルモが提供する医療機器使用時に発生するインシデント・アクシデントを防ぐために、電子添文*に記載された注意事項のうち、発生する頻度や危険度が高いものを模擬的に体験して理解するという教育プログラムである。

今回は、新型コロナウイルス感染症対策として、テルモメディカルプラネックス（神奈川県足柄上郡中井町）からのオンライン研修として実施された。この施設は、医療現場を忠実に再現したトレーニング施設で、集合研修の開催が難しいなか、オンラインを活用した取り組みを進めている。

研修対象者について、臨床医療管理部GRMの菊地雅人さんは、「当初は、受講者が病棟に戻ってからの伝達講

習も期待していたので、病棟のリーダー業務を担う看護師を対象としていました。コロナ禍ということもあり、参加できないリーダー看護師がいたため枠を広げ、若いスタッフから副師長クラスの看護師も参加できるようにしました」と言う。

T-PAS研修をオンラインで行うにあたり、菊地さんは臨床医療管理部副師長の小島明子さんとともに、テルモメディカルプラネックスでのテスト研修に参加した。そこで体験型研修の効果を実感し、臨床の医療安

全研修に採用しようと考えた。

小島さんは、「実際にシリンジなどの医療機器を使ってみる体験型の研修なので、正しい使用方法をより理解できると思い開催しました」と言う。

シリンジや血液バッグにひそむさまざまなリスクを体験

2日間のT-PAS研修に参加した看護師は40名。

まず、看護師が日常的に使用するシリンジについて、材質の特性によるリ



臨床医療管理部副師長の小島明子さん。「看護師が体験型研修を受けること、参加者の五感に訴えることの重要性を改めて理解することができました」



臨床医療管理部GRMの菊地雅人さん。「失敗を体験することでリスクを実感することは、理屈ではなく身をもって覚えることができるので有意義です」

*電子化された添付文書

●筑波大学附属病院で開催されたT-PAS研修



スクを体験するとともに、三方活栓との適切な接続方法などを学んだ。

「当院のインシデント報告のなかにも、『シリンジの中に空気が入った』『シリンジの接続部から薬液が漏れる』といったものがあり、その原因もある程度予測できたので、このコンテンツを選び、テルモの担当者にお

願いしました」と小島さん。

参加者からは、「実際にシリンジを破損してみたことがなかったので、正しく使用しないと薬液などが漏れたり空気が混入するというリスクを実感することができた」「講義よりも楽しく、失敗を体験することで理解が深まると感じた」「体験したことを

部署に持ち帰り伝えることで、他のスタッフにも伝達しやすいと思う」といった感想が多く聞かれた。

次に、輸血時に使用する血液製剤容器（血液バッグ）の取り扱い方法について体験した。

「血液バッグの破損もインシデント報告にあがっていたので、不適正な

使用によるものだと思っていました。びん針の正しい刺通方法が体験できたのでよかったと思います)(小島さん)

T-PAS研修後には、テルモが制作したDVD『みんなで考えよう医療事故防止対策——ルールを守って安全確認』(約60分)の一部も観賞した。

このDVDは、日本医療機能評価機構の「医療安全情報」に掲載されている事例などを再現したドラマ(基本

シーン)と、事例のポイントについての説明(解説シーン)で構成されている。観賞した事例は、「シリンジポンプ・輸液ポンプに関連した事例」だが、このほかにもインスリン投与や輸液ライン、患者誤認に関連した事例なども収載されている。

「事例の設定も具体的なので、院内の研修プログラムで使用できると思いました)(菊地さん)

現場のニーズに則した企画が今後の課題

今後の課題について小島さんは、「オンラインによるT-PAS研修は今回が最初なので、参加者にアンケートをとってコンテンツを見直したり、病棟への伝達方法も考えていきたいと思っています。今回も、勤務の都合でリーダークラスが参加できなかったり、伝達講習が負担になることも考えられたので、開催方法なども含めて検討していきたい」と言う。

菊地さんは、「外来や病棟ではさまざまな医療機器が使用されていますが、看護師はそれらのリスクを理解して正しく使用することで患者さんの安全を守らなくてはなりません。そのためには積極的に、臨床現場のニーズに則した体験型研修を実施していきたい」と話した。

また、オンライン研修自体の精度を上げるとともに、コロナ禍が落ち着けば、対面でのT-PAS研修や、テルモメディカルプラネックスでの医療安全研修も体験してみたいと期待しているという。



今回、筑波大学附属病院が実施したT-PAS研修を提供するテルモでは、輸液投与の安全性に配慮した「スマートインフュージョンシステム」や、クローズド輸液システム「シュアプラグADシリーズ」、がん化学療法で用いる閉鎖式薬物移送システム「ケモセーフロック」など、さまざまなシステムを提供している。

医療機器は実際に取り扱って覚えることが大切です



臨床医療管理部部長
本間 覚 教授

今回のT-PAS研修は、臨場感という面で優れていると感じました。コロナ禍の大学の講義では、録画したビデオを学生に流していますが、臨場感がなくなり、聞いている側のモチベーションも下がってしまいます。

それに比べ今回は、神奈川のテルモの講師も参加者の様子が見えていたようなので、リアルな講義とほぼ変わらない印象でした。また、双方にアシスタントスタッフがいたことも、円滑に研修が進んだ理由だと思えます。

今回の体験型研修は、ふだんは触れることのできない輸血セットのびん針などに触れたり、一度接続したものを外すといった、日常業務ではできないことも体験できてよかったのではないのでしょうか。

あらゆる医療機器には添付文書がありますが、読めばすぐにわかるというものではありません。したがって、実際に取り扱ってみて覚えることが大切です。

たとえば、血液バッグに針を刺すとき、多くのスタッフが失敗してバッグ本体を傷つけて血液が漏れ出した経験をしているはず。こういった体験を研修という場で行うことで、貴重な血液を大切に取り扱い、患者さんにより有益で安全な輸血を提供することができます。

「患者の安全のために行う」という共通の目的で、今後もメーカーと協力して継続していければと思います。